

シューベルト:《美しき水車屋の娘》

1823 年、26 歳のシューベルトが書いた全 20 曲からなる歌曲集。《冬の旅》や《白鳥の歌》とともにシューベルトの「三大歌曲集」に数えられているが、暗い雰囲気に含まれた《冬の旅》とは異なり、《美しき水車屋の娘》では素朴な民謡調の楽想にのせて自然な感情の発露が歌われる。

全体は明確なストーリーを持っている。ひとりの若者の遍歴への旅立ちに始まり、水車屋の娘と出会って、恋に落ち、青春を謳歌する。やがて恋敵が出現して、娘に対する疑念が生じ、苦悶のときが訪れる。そして最後は、娘に別れを告げ、失意のうちに死を受け入れるまでが、時間軸に沿って描かれていく。

《冬の旅》同様、本作のもととなった連作詩は、シューベルトと同世代のドイツ・ロマン派の詩人ヴィルヘルム・ミュラー(1794-1827)による。シューベルトがミュラーの詩に曲を付けたリートの数は、文豪ゲーテや親友だったヨハン・マイヤーホーファーに次いで、3 番目に多い。

作曲のきっかけは、シューベルトが友人のラントハルティンガー宅でミュラーの『ワルトホルン吹き の遺稿からの詩集』を偶然目にしたことにかかっている。詩集を借り受けたシューベルトは、翌日にはすでに 3 曲のリートを作曲していたという。

シューベルトの音楽は、詩に込められた心情の変化を、短調と長調のあいだを揺れうごきながら、旋律線を変化させていく手法によって表現しており、さらにそれがストーリーの展開と巧妙に組み合わせられて、詩と音楽の緊密な統一が図られている。

本作は、シューベルトと親交のあったアマチュアのテノール歌手カール・フォン・シェーンシュタイン男爵に献呈された。